

名和会長のシリーズインタビュー<<この人にきく>>⑨

大学生協京都事業連合前常務理事 平 信行さん

## 「大学生協人生を振り返って」

平さんは、京大専務時代からの知り合いである。余計なことは言わないで、業務をキッチンとこなす実務派であり、彼の机の整然としたさまは語り草でもある。しかし、平和問題や留学生問題になると穏やかな顔になり、話は尽きない。今回のインタビューで再確認したが、平さんは「世のため、人のため」「万人は一人のため、一人は万人のため」を最後まで貫き通した協同組合人であり、その原理原則を大切にする人であった。このような人がいるからこそ、大学生協は楽しいのである。

お話し 平 信行氏 (Tと略)

聞き手 名和又介先生 (京都事業連合理事長、京滋・奈良ブロック会長、Nと略)

### 生い立ち 学生の頃

N 今日には平信行さんに登場いただきお話しをお伺いしたいと思います。それでは生い立ちから。平さんはもともと寡黙なひとなので今日は珍しいお話しが聞けるかと楽しみにしています。

T 出身は広島県、現在は合併して北広島町という町になっていますが、合併以前は千代田町といって、島根県境に近い中国山地の山間の町です。家はコメ作りを中心とする農家でした。誕生日は戦後間もない1951年です。高校まで地元で過ごしてきましたが、大学進学にあたっては、「都会への憧れ」もあって同志社大学を選びました。親は賛成でなかったように記憶していますが、自分としては喜び勇んで法学部政治学科に進学しました。

N 広島と言えば赤レンガの農家のイメージがありますが。新幹線に乗って岡山から広島に入ると、それまでのグレーや黒い瓦から赤い瓦に変わるような。

T 石州(せきしゅう)瓦といいます。私の故郷でもみんな赤い瓦でした。私の生まれ育った田舎は広島県ではありますが、実は分水嶺は日本海側になり江川(ごうのがわ)に流れ込みます。浜田と広島を結ぶ広浜(こうひん)街道というのがありますが、その中間的な位置となり、食料も魚介類は日本海側の物が多かったと思います。

N 中国地方では正月に食べる魚は鰯(わに)であって、つまりサメを食べる食習慣がありますね「因幡の白兎」にも出てきておもしろいとおもうのですが、平さんの故郷でもそういう習慣はありましたか。



T 私のところでは食べることはなかったですが、広島県の東部、三次あたりでは「わに」を食べると聞いたことはあります。

N 中国山地で大きくなられて、どんな子どもでしたか。

T 普通の子でしたけど、中学高校で生徒会長に祭り上げられたりしていました。またスポーツ好きで中学はバスケットボール部、高校は柔道部に所属していました。

N 平さんは上背がそんなに大きくないと思うのですが、バスケットボール部と言うのは意外ですね。柔道についてはがっちりした体格をしておられるので分かる気がします。平さんは柔道をどれくらいやっておられたんでしょうか？

T 初段にはなりましたがせいぜいそこまでです。

N そうすると、中学高校で生徒会長をやられて、部活もしっかりおやりになっていた、いわば模範生といえますね。その平さんが同志社の法学部に入学されました。

### 同志社大学に入学

T 学園紛争のピークは1969年でしたが、私はその翌年の入学です。70年なので学園紛争の影響がまだ色濃く残っていましたが、その後も長く尾を引いていました。同志社では特に悪しき影響が何時までも尾を引いていたという想いが強くあります。入学した年には入学式がありませんでしたし、学内はヘルメットをかぶった学生が走り回っている状況でした。授業中も含めて暴力事件がしょっちゅう発生し、まさに荒れた大学という状況でした。私は4年間で卒業しましたが、何度もバリケード封鎖が行われた結果、期末試験がレポートに切り替わったりすることもしばしばでした。法学部には入ったけれども法律や政治をじっくり勉強するという状況ではありませんでした。多分に本人の責任も大きいですが。

N 法学部を選んだ理由はなんですか？

T 高校時代から政治に関心があったのは事実です。特に60年代末にはベトナム戦争が激しさを増していましたし、運動に参加していたわけではないですが、講演会に参加したり、ドキュメンタリー映画を見たりして、関心は強く持っていました。

N 大学を4年間で卒業後、生協との関わりは？

T 学生時代、生協の運動をしていたわけではありませんが、水曜会という、資本論を購読するサークルに所属していました。きっかけは下宿の先輩に紹介されたことでしたが、一生懸命に取り組みました。学生時代では一番の重点だったと思います。

N この間開催している「読書カフェ」で、資本論が取り上げられることもありましたが、平さんが学生時代の当時は「資本論を読まない」というような雰囲気があったのでしょうか？



T それほどではないでしょうが、やはりそれに近い雰囲気はありましたね。

N 生協への就職の動機は？

T 学生時代の生協との関わりでいうと、一総代、それでしかなかったです。ただ1・2度だけ総代会の議長をやりました。

N それは、それだけでしかなかった、とは言えませんね。

T 生協食堂でアルバイトをしていて、その関係で昔でいう「組織部」、今の学生委員会のメンバーと交流はありました。自分としては就職活動の選択肢の一つに生協をおいていました。当時はまだ難しい採用試験というようなものはなく、生協の常勤役員から『じゃあ来るか？』というような雰囲気でした。自分としては自然な感じで生協へ入ったと思います。就職については、「より直接的に社会のために役立つ仕事」を選択したいという思いはありました。

N 就職の動機は政治的と言えます。『世のため、人のため』とよくいわれますが、就職の動機としては、珍しいですね。私も生協とかかわってきてそう思うようになりましたけれど。

## 同志社生協で12年

T 生協に就職して最初に配属されたのが食堂です。店は現在の寒梅館のところにあった「学館食堂」です。当時、大学卒の新採職員で食堂配属は初めてといわれました。当時同志社だけで10人を越える同期がいて、そのうち私ともう一名が食堂でした。

N 最近では京滋・奈良の大学生協の採用枠が1~2名だと思いますが、同志社だけで10名以上の採用とは！組織の規模が大きくなっていく時期の反映だったんですね。

T 食堂での労働は一日立ち仕事で床は水だらけで、最初の頃、体力的にしんどかったという思いは今でもよく覚えています。慣れるのに1カ月以上かかりました。そして食堂の先輩、上司は街場でのコック経験を持つ人達が多く、当時はそうした人たちによって大学生協は支えられていた状況でした。いわば「腕に自信のある」熟練したひとたちと一緒に仕事をしたわけですが、そういう意味で大きなギャップを感じていました。しかしそういなかで早く一人前になりたい、早く調理を覚えたいという気持ちが強くありました。

N 平さんは食べることについてどんな関心がありましたか？

T 特別に関心というものはありませんでした。結局食堂には2年いてその後、総務経理の仕事に移りました。都合12年同志社生協に在籍しましたが、最後は同志社田辺キャンパスオープン後の1カ月を経験した後、京都工芸繊維大生協に専務理事として赴任しました。当時36歳でした。

N そうすると田辺キャンパスでは、私と1年くらい重なったかもしれません。平さんは学生時代を含めかなり長期にわたって同志社にいられたということになりますね。

T 工芸繊維大学生協で専務理事にはなりましたが、当時は現在のように教育システムが整っていないくて、先輩の仕事を見よう見まねでやるところから始めたように思います。とに

かく経営を赤字にしてはならないという緊張感がありました。もっとも当時はまだバブル経済の最中で、工芸繊維大は国立理系大学ということもあり組合員の学内滞留時間も長く、経営は順調でした。赴任前の累積赤字も前任者の時に大半が解消されており、私の赴任した年で完全に解消されました。

N 工織大での忘れられない思い出といったものはなんでしょう？

T 組織部（学生委員会）の活動は活発でしたが、当時は消費税が導入されるかどうか緊迫した状況下にあります。生協全体としては導入反対、しかし当初組織部の学生の腰は重かったわけです。そうしたなか学習会を積み重ねていくなどしていく内に、学生らが大きく変わっていったんです。私が知らないうちに北大路烏丸交差点で売上税反対の街頭署名をおこなったり、全国の集会に代表を送るなど大きく変化し、成長していきました。

N 工織大生協ここにあり、の運動をつくってくれたわけですね。

T 結果的に 89 年に消費税は導入されましたが、生協は外税方式によりレシートに商品の金額とともに消費税額を明記したり、総代会議案書にも消費税額を報告するなどして組合員に納税意識を持ってもらえるよう努力しました。

N 教育的な計らいですね。工織大のあとは？

### 京都大学生協の常務・専務時代

T 工織大には 3 年半いて、そのあと 1989 年 11 月に京大生協に移籍し常務理事になりました。その時の京大生協は役員は一人体制でしたが、小塚専務のもとで二人体制となりました。

N 京大と工織大とでは違う面がかなりありますね？

T 規模も違いますが、それとともに教職員委員会、院生委員会、それにキャンパスごとのキャンパス運営委員会などがあり、より主体的に生協を構成する人たち、組合員の幅の広さを実感することになりました。特に教職員組合員の生協を支援する思いの熱さを感じざるを得ませんでした。



N 京大生協の専務理事は全国理事でもありその他さまざまな役割を担うことが多いので学内にいないことも多く、常務理事はそれを支える役割が求められますね。

T 常務理事としての最初の重点は管理部系の仕事でした。

N 京大生協の職員 60—70 名を束ねることは大変だったと思いますが、最初京大へ行かれた時はどんな意気込みをもっていましたか？

T 具体的には経営問題の中でも校費問題がありました。京大生協の校費取扱高は大きく、回収見込みがない、また見込みの有無すらわからないものが毎年発生するわけです。一定の時期には処分する必要があるわけですが、総代会などでも問題になる、監事会にも分かり易く報告しなければならない。また、京大生協では商品偏差、ロスもばかにならなかつ

たわけです。そうしたことを重点的にとりくみました。京大生協の経営状況は 88~89 年頃まで赤字が続いた結果、役員二人体制が必要ということで私が入ったわけですが、ルネができる 94 年ころまでには経営は回復し、順調に推移していきました。

N その後京大生協専務理事に就任されて以降、留学生委員会活動にもサポートを惜しまない、留学生からは「平専務は何でも聞いてくれる」との声もありましたが？



T 留学生との最初の関わりは、京大生協 45 周年記念行事の一環で、絵画展をコープインで行った時でした。結構な値段の絵画を主として教職員組合員に供給し、収益の一部を京都市国際交流センターを通じて留学生に贈ろう、という企画でした。ところが、京大経済学部の佐藤先生が生協本部に来られて、そんな支援のありがたではなく留学生との生の接点をもったとりくみにすべきだとお叱りを受けました。それから生協として留学生との懇談会を持つなど、留学生の声を聞くことになり、そのことが留学生関係の本当のとりくみのスタートとなりました。最初に、留学生が今一番したいことから始めようということになり、ダンスパーティの開催を手がけることになりました。1995年のクリスマスの夜、ルネ食堂でダンスパーティの開催を計画し、何の経験もない留学生が必死で宣伝と準備をし、成功させました。企画が成功した後のみんなの歓喜をみて感動したことを思い出します。この実績の上に 96 年 2 月に 10 人のメンバーで留学生委員会が設立されました。留学生の要求を誰かに一方的に求めるのではなく、留学生自らが力を合わせて実現していくようにしよう、ということが留学生委員会設立の最大の目的でした。設立にあたっては、留学生が自らの思いと言葉で留学生委員会の「理念と目的」を作成し、全員で確認しあいました。

N 京大生協留学生委員会が全国で最初の委員会ですか。

T そのころすでに名古屋大学生協で留学生委員会があったと聞いていますので、京大生協は二番目だと思います。

N 私も留学生日本語弁論大会に関わったりしてきました。ソボダさんというウイグル出身で踊りの上手な留学生が中心となって活動したり、王さんという留学生は弁論大会のなかで、大学生協のピースナウ企画に参加し、中国では日本人はひどいということしか言わない中で、日本も原爆の被害を受けたこと、平和のとりくみを大切にしていることなどを語ってくれ、中国のひとにも伝えたいといってくれました。こういうすばらしいこともありましたが、そこから発展していないという状況もあります。

T 京大生協では新入留学生を、先輩留学生が自らの体験をもとにして歓迎するとりくみをすすめてきました。大学生生活と生協紹介パンフレットも日本語、中国語、ハンデル、英語の 4 カ国語で作成してきました。生協の機関誌『らいふすてーじ』に留学生のページを掲載し続けてきました。京大には千数百名の留学生がいますがそのうち約 7 割が私費留学生

で経済的に非常に厳しい状況があります。アルバイトで自活する人が多く、特に学部生などは授業後すぐにアルバイトに向かうなど、一日を教室とバイト先と下宿だけで過ごしています。それによって京大生としてのアイデンティティを持ち得ない、京大構成員としての自覚が持てない状況に陥っているように思いました。京大の学園祭である「11月祭」はかつて留学生にとっては無縁の存在でした。しかし1996年の「11月祭」で初めて留学生が模擬店を出すことになりみんなで力を出し合い成功させることができました。京都大学における留学生の存在と意義を発信し始めた貴重な機会でした。生協に留学生委員会のできた重要な意味はこういうところにあったように思います。

N まだまだ多くの大学が、留学生の持ち味をどう引き出していくか悩んでいるという状況ではないでしょうか。ところで平さんは京大にはどれくらい在籍されていましたか。

T 京大生協には18年いました。その内専務理事就任期間が8年と半年です。2000年から専務になりましたが、2004年から法人化となる国立大学の歴史的变化の時代と重なることになりました。国立大学法人化のもとで大学生協と大学との関係をどう発展させていくのが極めて重要な時でした。当時の京大では、大学法人化に先行させたり、それを象徴化するようにキャンパスのアメニティ改善、福利施設改善が集中的に行われました。正門前のカフェ・レストラン『カンフォーラ』の新設、宇治生協会館の拡充と全面改修、時計台記念館の竣工、桂キャンパスの施設オープンが進められました。桂キャンパスは第一期が2003年で法人化の前年にオープン、第二期が2005年で法人化の翌年にあたり、この時までの数年間は本当に大変な時でした。

新しい施設は最初から生協が担うものと決まっているわけではなく、場合によっては他の民間事業者が入ってくることもありましたが、生協としては積極的にアピールを強めていきました。結果的に生協がかなりの部分を担当することになりましたが、数年で5億円を超える投資規模となりました。このように大変な時代ではありましたが、なんとか乗り越えてこられた要因の一つに2002年に策定した「京大生協のMission: 三つの使命とVision 2010」があったと思います。すべてのことが「Vision 2010」で描いた通りに遂行できたわけではありませんが、京大生協の基本的価値を集团的に作成し仕事の基本にしていたことは、私たちが頑張るための、心の拠りどころともなっていました。

N 日常の仕事を進めるにしても設計図というかチャートがなければ進めていくことは困難でしょうし、京大生協では「使命とビジョン」がその役割を担ったということですか？

T その「使命とビジョン」をつくるにあたって、総長や学部長などのトップにビジョン・インタビューし、大学が今後どうなっていくのか、また生協に求められるものは何かといったことをヒアリングして



いきました。そこではかなり率直な意見も出されてきたわけですが、そうしたものも含めてビジョンに反映していきました。言い換えればそこまでやって作ってきたんだ、ということが確信にもなっていたと思います。

N その後事業連合に来られるわけですが、それまでの間システム問題をはじめ大きな課題が存在していたわけですが？

T 当時事業連合はシステム問題や職員不祥事問題など様々問題があるなかで役員は沼沢専務一人という状況でした。近畿厚生局から指導があったり、監事会からの指摘も続いていました。京大生協は国立大学法人化問題が一段落したため、私が事業連合に移籍することになりました。連合の状況について何も知らなかったわけではありませんでしたが、実際に移籍してから様々な問題に直面することになりました。たとえば食堂の店長会議はそれなりの参加のもと開催されていましたが、毎月のショップの店長会議などは数人しか集まらないこともあるほど求心力を失っていたと思います。そうした現状に対して、原則的に活動、業務を続けていく中で、店長会議の参加者等も増えるようになっていきました。

N 事業連合の98年以降の改革がすすめられるなかで、縮小傾向に走りすぎ、結果として事業課題がおろそかになったのではないかとの思いもあります。そうしたなかで平さんに来ていただいて立て直しを進めることになりました。特に最後は総合リビングを担当され、情報公開をすすめつつ理事会、監事会で改善方針をていねいに提案され、解決の方向性が見えてきたと思いました。平さんの仕事ぶりをずっと見せていただいて、拙速に走ることなく信頼を得ながらすすめてこられるのをみて、如何にも平さんらしいと感じた次第です。最後に、大学生協に対し希望をお伺いしたいと思います。

T 長い大学生協人生の中で、多くの生協役職員や非常勤理事の皆さんに大変お世話になり感謝申し上げたいと思っています。同時にいろいろ関わりのあった生協組合員のみなさんにも感謝の気持ちを持っています。例えば、忘れられない記憶として残っているのは京大生協で校費システムを作り上げた時のことです。京大生協の校費供給は規模においても小さくありませんが、学部ごとにしくみが違うというように複雑さにおいても際立っていました。そういう状況のなかで校費システムを作るのは不可能とも言われていました。しかしそれにも関わらず開発出来たのは大学職員のみなさんの全面的と言ってもいいほどの支持と協力とサポートの結果でした。大学にとっても京大の公費の実態を何とかしなければ、という危機感があり、ある意味で生協と目的が一致したということでもあります。

大学生協の業務、活動も大変幅広く、多様になっていますが、個々の場面ごとに、個々の組合員さんと一緒に活動が進められ、それらを統合したところに大学生協全体の像が結ばれるのではないかと思います。これまでもそうでしたし、このことがこれからの大学生協の将来を形作っていくのではないかと、との思いを生協人生を通じて一番強く感じています。

N 最後に平さんより、生協のあり方について平さんらしく基本原則を語っていただいたと思います。本日はどうもありがとうございました。

(2011年6月18日インタビュー実施)